



学校だより

# はと広場

9月号

平成30年8月28日

さいたま市立北浦和小学校

TEL 048-831-2463

## 一步踏み出せば 何かが始まる

校長 益子 聡

1970年代、社会現象ともいえる大ヒットとなった少女漫画『ベルサイユのばら』の著者 池田理代子さんは現在70歳。幼いころからの夢だった声楽家を志し、47歳で東京音楽大学に入学しました。〈一回限りの人生、この夢をかなえておかないと必ず死ぬ前に後悔すると思った〉と『続・僕たちが何者でもなかった頃の話をしてしよう』の中で述べています。(2018年・文春新書)

### ◆ 大いなる後悔をしないように

1965年、池田さんは18歳で東京教育大学(今の筑波大学)に入学。その頃、学内ではストライキがしきりに起こり、池田さんも学生運動の波に引っぱり込まれて抜け出せなくなりました。同じ頃、親の巣の中から出て自分ひとりで生きてゆくと意気込んで家出、経済的にも自立しなくてはいけなくなり、生活のために漫画を描き始めました。

当時は貸本屋という店があり、自分が描いた漫画を貸本屋に納めて原稿料をもらうことができました。

大学3年の時、漫画を描いて持ち込んだ大手出版社の編集者がたまたま大学の先輩であったことから声をかけてもらい、5年後に『ベルサイユのばら』の連載が始まるや否や空前の大ヒット。3年後には『オルフェウスの窓』も連載を開始。この2本で池田さんは漫画家として不動の地位を確立しました。

40歳の時、彼女に転機が訪れます。更年期障害を迎えこれからの人生について悩む日々が続いたのです。その時考えたのは父親のことでした。太平洋戦争で最も過酷と言われた南方の島々の戦争に駆り出され、多くの仲間が戦死していく中、父親は奇跡的に生き残ったのです。終戦の年から2年後に生まれた池田さんは〈命をつないでくれた父がいて母がいて、私が生まれた。なんとという有難いことだろう〉と実感しました。“若さ”ゆえに、長い間気がつかなかった両親への感謝の思いでした。同時に〈自分はもう人生の折り返し点にいる。これからの人生の後半はこのままでいいのだろうか。残された自分の時間の中で何ができるだろうか。他にやりたかったことはないだろうか〉と考えました。そして〈私はどうしても音楽大学でクラシックを勉強したい。一回きりの人生でこれを叶えておかないと死ぬ前にたいへんな後悔をするだろう〉と、迷いに迷って45歳で決意。2年間、受験勉強をして音楽大学に入ったのです。

〈卒業するときは51歳。現役のオペラ歌手が引退を考える年頃です。その年齢から何ができるんだろうと考えると怖かった。でもやらない怖さの方が大きかった〉と池田さん。そしてこう続けます。〈人間、どんな生き方をしても後悔はつきもの。進学、就職、結婚、基本的に後悔のない選択なんてない。その中で一番怖い後悔は、あの時やろうと思えばできたのにどうしてやらなかったのかという後悔です〉。

### ◆ いつも前向きに挑戦する

人生の中で、失敗や挫折、苦難の体験というものは誰もが味わうものです。子どもたちも、間違いや失敗を経験することなく、勉強やスポーツなどがすぐにできるようになるということはめったにありません。ここで乗り越えてほしいことは、失敗や挫折を恐れて一步前に踏み出すことをためらったり、避けてしまったりするなど、やらない理由を自分で作ってしまうことです。池田理代子さんが声楽家を目指したときも〈声楽家になることは小さいころからの夢だった。でも、もう47歳だから、諦めようかな〉と考えてしまえば、そこから進むことはなかったでしょう。彼女は、その時〈あの時、どうしてやらなかったのだろう〉と後悔だけはしたくないと考え“だから”の2文字を〈47歳だけど、諦めずにやってみるぞ〉と、前向きの言葉に代えることで夢が実現したのです。“だから”と“だけど”—わずか2文字の差が、できるようになる人とできないままで終わり後悔する人の大きな差となって現れるのです。

2学期がスタートしました。運動会や音楽会などの学校行事や学習などで、新たな目標を作って頑張る子どもたちも、困難にぶつかることが多いと思います。その時、思い通りにならない、うまくいかないということを正面から受け止めつつ、あとで後悔することのないよう“〜だけど、頑張ってみようぞ!”の精神で、何度でもチャレンジしてほしいです。私たち北浦和小の教職員も、子ども一人ひとりに励ましの言葉や自信を沸き立たせる言葉などをかけることで、子どもたちが最初の一步を踏み出せるように背中を押してまいります。